

新陰流弘流

河越合戦で上杉管領軍に勝利した北条氏康は、東駿河を失ったが関東覇権に向けては大きな前進を遂げることとなった。

岩付城の太田資時^{すけとき}、天神山城の藤田康邦、忍城の成田長泰らが家臣団と領国を維持するために、早くも氏康との接触を開始したとの情報もたらされた。

その中で、損傷の少なかった箕輪勢（箕輪城軍、支城十二家）は、帰着後の評定で

「北条の上野への侵攻を徹底阻止し、上野を侵略から守る」

との決意をあらためて確認した。

そして、北条に対抗する勢力の動揺を抑えるために、関東各地の河越参戦勢に箕輪の決意を伝えた。

その箕輪勢の中でも、上泉城は北条の脅威から超越していた。

城主上泉伊勢守秀綱は、後に名を信綱と改め剣聖と呼ばれるようになる剣術の達人で、十一年前の二十八歳の時に、剣の道を極めて「新陰流」を創始した。

剣術の盛んな関東でその名は鄙^{ひな}にまで及び、河越合戦の後も三河や遠く畿内からも上泉剣術場を目指す者が年々増えて、城元の町に逗留^{とまりゅう}して入門を志願する者が後を絶たなかった。

秀綱の剣術道は、実戦で人を斃す戦場剣術を超越していた。

敵の動きを捉え動きに従い転変して、待ち懸かりて制する刀法。として高弟と研鑽を積み、奥義を深めていた。

秀綱は多くの志士に新陰流を広めることを望み、争いで損なう命を少なくすることを目指して、志願者の身元と動機と資質のほどが確認できれば、入門を受け入れてきた。

一年前に着手した新道場の普請は、父の代に開いた上泉剣術場の上段の間（床が一段高い上級者の鍛錬の場）が手狭となってきたために、新たな上級者の道場として高弟が直接指導に立ち合う道場となる。遠くからやって来る入門志願者はひとかどの使い手がほとんどで、新道場で鍛錬を受ける者が増えている。ひと月前に出来上がった新道場は、けた間十六間、はり間八間の大堂で、瓦葺きの大屋根が際立っている。張り出している玄関部分の出屋根は二重で威厳を漂わせていて、鹿島の剣術場に似た重厚で格調ある外観を呈している。

武徳修館は、武神を祀る常陸の鹿島神宮の森続きの西、鹿島城内にある。

父義綱と秀綱の二代が、厳しい修行の末に天真正伝鹿島神道流の奥義を修行した道場である。生涯忘れ得ぬ武徳修館の堂宇の威厳のある外観は、伊勢守にとって剣術場そのものであり、新道場のたたずまいにその面影が色濃く現れている。

新堂の玄関の式台の正面には「転変無形」と刻字された銘板が掲げられている。

入門者が、

「扁額の四文字は、いかなる意味でありましょうや」

との問いに、

「修行を終えこの堂を振り返る折に、その意自ずと判ず」

との答えが帰ってくる。

門人の間では、既に無形殿との呼称が付いている。この風格ある無形殿ができて以降、上泉の剣術場の評判はさらに遠国まで高まっていく。

天文十六年四月、新陰流門下一行が上泉をたち、関東弘流の旅に出た。

伊勢守四十歳、二度目の諸公歴訪で、この度は嫡男大炊介秀胤を同行させている。

ここ数年伊勢守は新陰流を剣術の道として、人が成す道の術として、高弟を通じて門人たちに示している。絶えない戦の世にあって、剣術を深めて応変柔軟な心を備え、敵の動きを捉えて待つ技量を持ち、敵に従って転変して制する、確立しつつある新陰流・活人剣の具現である。このために多くの立ち合いを通じ、さらなる研鑽を求めて弘流の地に赴く。

前回は各地で門をたたいたが、今回は名声をもとに請われて訪ねる先々だけである。

古河公方、小山氏、結城氏、佐竹氏、鹿島神宮など全十二カ所で、その中には小田原北条家